
七つの鍵の物語 - 【祝祭日】

上野文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの鍵の物語 - 【祝祭日】

【Nコード】

N8481N

【作者名】

上野文

【あらすじ】

粗大ゴミは出てけー！ぬいぐるみによつて宿を蹴り出された遺跡探索者ニードルは、カジノへと向かう。浪漫を求め、今祝祭日の幕が上がる！

第一話 早朝

「どうしてこんなことになったんだろう？」

晴れた空は、砂漠から巻き上げられる黄色い砂で曇って、うつすらと霧のように霞んでいた。

紅い外套を着込んだ黒い長髪の男は、公園の塗装が剥げたベンチに座って、鍛えられた体躯に似合わない重い息を吐いた。

時刻を確かめようと懷に手を伸ばして、彼は苦笑した。

以前使っていた懷中時計は人にあげてしまった。代わりに用意した軍用の腕時計は、仕事の中ならともかく私用では使いたくなかった。今日、西部連邦人民共和国のハルダラ地方は収穫祭で賑わっていた。周りを見渡せば、カップルらしい男女が腕を組んだり、手を繋いだりして散策中だ。

最近政府がやたらと打ち上げる、ヨウ化銀と魔法陣を組み合わせた人工降雨ロケットも、今日ばかりは打ち止めらしい。

「こおんな天気の良い日だって言うのに、いったい俺はア何をやっているんだ？」

ベンチに一人座り込む自分が、酷く滑稽で、孤独に感じられた。

そもそも何故このようなことになったのか。そもその原因を彼、ニードル・ゲレーゲンハイトは思い返した。

七つの鍵の物語 祝祭日

共和国暦一〇〇四年、霜雪の月（2月）22日目。

ニーダル・グレーゲンハイトは、ハルダラ領主の依頼による地下遺跡探索を完遂した。

モンスターの溢れるハルダブラの遺跡に潜り、付近の村々を荒らしていた巨大蜘蛛や悪鬼を退治して、回収した金品と防衛用のマジックアイテム十一個を納めた。

期限は一ヶ月という限られたものだったため、14日目に表層部以下一五階層を制圧した時点で、ニーダルは共に潜っていた養女イスカに自宅での待機を命じた。

長銃を武器とする彼女は、洞窟や地下施設での戦闘では本来の実力を発揮できない。彼女の安全を鑑みた上でも、妥当な措置だと思っている。

だが、単独で残り一九階層を制圧するのは、熟練の遺跡探索者であるニーダルにしても骨だった。

アーティファクト
第六位級契約神器エルヴンボウ。ライブニッツ地方の古代遺跡から発掘した強力な魔銃オーバーを持つイスカは、単独でもニーダル以上の殲滅力を発揮する。背中を預けるようになってからの数ヶ月、どれほど彼女の援護に頼っていたかを、彼は思い知る羽目になった。

それはさておき、依頼は果たした。謝礼を受け取ったニーダルは、自分とイスカの海外口座に振り込んで、夜の街へと繰り出した。ハルダラの領主は商才の無いベーレンドルフ軍閥に属する癖に、金払いが良かった。女の子をナンパし、夜の街で遊び、浴びるほど酒を飲んだ。

明けて、霜雪の月（2月）23日目の朝。悲劇は起こった。

激戦の疲れと二日酔いで朝寝を愉しんでいたニーダルを、養女のイスカと、彼女の愛銃に宿る神器の意思ベルゲルミルが叩き起こしたのだ。

「パパ。お掃除、しよう」

「いつまで寝ているのです。この甲斐性なし！」
「……」

桜色の花柄の寝巻きを着た蜂蜜色の髪の娘と、彼女の腕に抱きついた灰色熊のぬいぐるみを、寝ぼけ眼のニーダルは呆然と見つめた。次の依頼はロアルド地方に決まっていた。一ヶ月暮らしたこの町も、二、三日中には発つことになるだろう。けれど、何も仕事が終わったその日に片付けに入らなくとも、と。

ニーダルが焼いたパンと卵、イスカが刻んだサラダの朝食を終えて、二人は引越しの準備に入った。

布団や洗濯物を干すことから始まって、ニーダルが家具や絨毯を引っぺがして掃き清め、イスカとベルゲルミルが雑巾を掛けて……、片付けは順調に進んだ。

掃除が終わって、荷物の整理に入るまでは。

「捨てましょう。こんなゴミ」

「馬鹿言うんじゃないっ」

灰色熊のぬいぐるみがポイポイと投げる切手や、酒瓶の王冠を詰めたファイルを、ニーダルは慌てて受け止めた。

「こ、このクソクマ。なアんてことしやがるんだ」

「もう使えない切手や金属片に何の価値があるんですか？」

「男の浪漫と収集家の魂！ だいたい借り物だつて入ってるんだぞ
っ」

「例のC・A・氏とやらですか」

「三倍速で走りそうなペンネームで格好いいよな」

ニーダル・ゲレーゲンハイトは、基本的に無趣味な人間だ。

ナンパの為の労力は欠かしたことがない為、雑学は豊富だが、何かひとつのことに入れ込むことはなかった。

ところが、彼にとって最大の取引相手である、シュターレン軍閥領袖、エーエマリツヒ・シュターレンは、郵趣家として知られており、遺跡探索の依頼のついでに、切手の購入やはがきの郵送を頼むことも多かった。ニーダル自身もまた、言われるままに買い集める

うちに、旅の記念にと買い求め……、そうすると、自然他者のコレクションや希少な切手にも若干の興味が湧いてくる。

ニーダルは、大都市の郵趣家の会合に顔を出し、地脈通信の掲示板にも足しげく通うようになった。彼は、そこで知り合った、C・A・なる者の「男の生き様」に大きな感銘を受けることとなる。

彼が集めているのは切手よりもむしろ消印だったが、文通を始めるようになって、彼の語る切手に込められた造形美と、風景印や希少な消印、あるいは特定の数字と組み合わせることによる美術的な衝撃、犬馬の労を厭わず一途に理想のコレクションを追い求める求道精神は、ニーダルを虜にした。

……が、多くの趣味者がそうであるように、ニーダルもまた、というか、ニーダルだからこそ、周囲の無理解に苦しめられることになった。

エーエマリツヒの息子、ツァイトリツヒなどは「君が郵趣!？」

悪い冗談はほどほどにしまえ。本当はポルノ鑑賞だろう? いや実演かな」と堂々と言い放ってくれたし、イスカも「ン。インクはつけないほうがきれい」とさっぱりわかってくれず、クソクマことベルゲルミルに至っては隙あらば捨てようとする始末。

言い争うこと10分あまり、ついに灰色熊のぬいぐるみもニーダルの説得に折れた。

「わかりました。そこまで言うなら、私も鬼ではありません。代わりにこれらの酒を処分することで手をうちましょう」

そう言ってベルゲルミルは、ニーダルが買い集めた希少な各地の地酒に駆け寄ると、低く小さな上背を精一杯伸ばして爪先立ちでよりかかり、よいせよいせと酒瓶を強引にゴミ袋へと押し込もうとはじめた。

「バ、バカヤロウ 酒こそが男の息の血を燃やすものじゃねーか」
慌ててベルゲルミルの首根っこをひつつかんだニーダルは、唾のかかるような勢いで抗議した

「晩酌の一杯や二杯なら、文句は言いませんよ。だからって、こん

なにもいらないでしょう」

「わかつてねーな。月の晩に飲む酒。花を見て飲む酒。雨の音を聞きながら飲む酒……、それぞれに風情があり、その場にあつた酒があるんだ。粹の息吹を感じたとき、好いた酒が目の前にある。それが大事なんじゃネーか」

「アレもダメ之もダメ。おまけに理由が男の浪漫だのと。浪漫でパンが食べられますか」

「男はパンだけじゃ、生きられねーんだよ」

「ああいえば、こう言つて！」

ニーダルの黒い瞳と、ベルゲルミルの円らな瞳が火花を散らす。至近距離で顔を合わせ、怒鳴りあう保護者達に、イスカはおろおろしていた。彼女にとってニーダルは養父であり、ベルゲルミルは養母のような存在だった。必死で息を吸つて声をかけようとするが、どうしても口を開けない。

泣きそうになって涙をすすり、それでも二人は気づいてくれなくて、とうとうイスカは意を決し、ニーダルの背にしがみついた。

「だめ、だよ。けんかしちゃ、だめ」

背に触れた小さな手の感触に、ニーダルの沸騰ふっとうしていた血の熱が、一気に冷めた。

「悪い。喧嘩じゃないんだ。熱くなって悪かった。ベルも、そうおも」

振り返った熊を見て、ニーダルは一瞬気おされた。何が気に入らないのか、彼女は目を真っ赤に光らせて、獣の様に息を荒げて怒っていた。

「粗大ゴミは出てけ〜」

こうして、ニーダルはぬいぐるみによって貸し宿を蹴り出された。

空は黄色くにこつていた。

収穫祭で賑わう街は喧騒に酔い、若い男女は睦言を紡ぎ合い、ニードルは公園のベンチで膝を抱える。

「あの熊、いつか必ず鍋にしてやる。言うにことかいて、粗大ゴミはないだろうが、粗大ゴミは」

確かに、このところ家事はイスカに任せきりで、宿にもろくに帰れなかった。だが、それにはちゃんと理由があるわけで。

「イスカ、大丈夫だよな。まだ食材は残ってるし、金もあるはずだし。いざとなったら鳩を飛ばして連絡を……」

いい年した男が公園のベンチの上で体育座りしてブツブツと呟く様は、はつきり言って格好のよいものではない。

実のところ、それほど心配はないはずだった。イスカはニードルの養女であると同時に、彼が背中を預るに足るかけがえのない相棒だ。一人で自給自足も出来るし、万が一スリや暴漢に襲われるようなことがあつたとしても、余裕でり討ちにできるだろう。というか、ベルゲルミルが傍にいる以上、第四位級以上の神器と契約を交わした盟約者でもない限り、むしろ襲撃者の命が危ういはずだ。

大丈夫、大丈夫だと自分に言い聞かせるように何度も深呼吸して、ニードルは不意に違和感に気づいた。

「ちよつと、待て。俺はなぜあいつらの心配ばかりしているんだ」
体育座りを解いて立ち上がり、ニードルは周囲を見渡した。休日
の公園だ。腕を組んで歩く恋人達や、家族サービスに引きずり出さ
れたらしい父親の姿が見えた。自分はどちらの側の人間だ？

命知らずの冒険者として、血と汗に彩られた男道を歩んできたはずだった。だが、数ヶ月前、あの娘を引き取って以来、男としての
牙がさび付いたのではなからうか。

「雪祭り、見に行きたいのか」

「んっ……」

国中を転転とする仕事の醍醐味といえ、休日となれば、買い物や
観光に連れ出される日々。

「花、見に行きたいのか」

「ンっ……！」

最初は、ナンパのいいネタが出来たと喜んだものだった。観光地といえど、独り身の女性旅行者や、女性のための旅行連れがいないわけじゃない。

口うるさいベルゲルミルも、イスカと一緒に連れ出せば、文句は言わない。

しかし、現実はその甘いものではなく。

「その兄ちゃん。ワシ、腰を痛めてのう。悪いがフランクフルトを焼くのを、代わってくれんか？」

「じゃあねえなあ。爺さん、俺っちに任せときな」

なぜか出店の屋台を手伝わされたり。

「兄ちゃん。演台を組み立てるんだが、人足がたりねえんだ。給金は弾むから手伝ってくれ」

「じゃあねえなあ。ま、メインがなきゃあ盛り上がらねえしな」

と、舞台設営の突貫作業を手伝わされたりする。

どうやらイスカを連れたニーダルは、求職中の子連れやもめに見えるらしい。これでは、ナンパに来たのか祭りの手伝いに来たのかわかりはしない。おまけに。

「ええー、ほんとあ」

「本当だって、あの切り台から見た雪桜が絶景で……」

上手く女性に声をかけて、いい雰囲気になると、必ず。

「パパ、あつちでお花がさいていたの。いつしよに見よう」

「いつまでぶらぶら遊んでいるのですか。食事の時間です！」

決まって邪魔が入るのだ。とくにあの熊が！

「これっていいチャンスじゃねえか」

今日、あの熊はいない。どれだけ女を口説いても、どれだけ酒を飲んでも邪魔されない。

ニーダルは懐から財布を引き出した。今日は祝祭日。銀行から金を下ろせず、手元には昼飯代のみ。だが。

「無いなら増やすのが男つてもんだろ！」

駆け出す。

紅い外套に吹きつける風に、自由を感じた。黄色く濁った雲も、薄汚れて割れた道路も、いちゃつくカップルも、世界の全てがニードルを祝福しているようだった。

「はは。ははははッ。はーッハッハッハ」

ニードルの霜雪の月（2月）23日目の祝日は、こうして幕を開けた。

第二話 午前

2

「ふふふ。ははははは。あーッはっはっは」

幕はとじた。

数時間後、カジノ内にあるロビーの片隅で、真っ白になって立ちすくむニーダルの姿があった。

幸か不幸か、「そんなことに情熱を注いでどうしますか!？」と牙を閃かせて噛み付いてくる熊はいなかった。

最初は調子が良かった。ニーダルは趣味程度だが手品を嗜んでいるし、ブラックジャックという副業柄ある程度の手癖も見抜ける。

BJでコインを荒稼ぎをしてハイ&ローで倍々にし、最後にポーカーで老年のディーラーと真っ向から勝負して、負けた。

「ふつ。こオれも男のロマンってやつさ」

気取ってみるが、いつもの紅い外套を脱いで、スリーピース・スーツを着たニーダルの背中は煤けていた。

そもそも胴元は、莫大な設備費を回収するために、必ず勝つ様になっているのだ。

あまり知られていないことだが、機械式の球入れ遊びや絵合わせ遊びは、遠隔操作の特許が堂々と取られていたりする。

魔力演算機を使えば、数十台分の設定をボタンひとつで管理できるし、精算に識別カードを使う店では”カードごとに自動で設定を変更できる”ように基盤や配線をいじることすら可能だ。確率なんて信じて遊ぶのは、店側に遊ばれているようなものだろう。

とはいえ、今度の場合、機械相手ではなく人間を相手に負けたのだから、納得もいった。

「勝負こそ、俺の魂の坩り所！」

冷静に考えてみれば”家庭に居場所がなくなり賭場に逃げてオケラになった”なんて坂道の転げ落ちっぷりは格好悪い気がしたが、気にしてはいけない。

「くうう、あの切手レアものなんだが……」

ニードルが燃え上がったのには、理由があった。

このカジノでは、コインを現金に換える他に、景品と引き換えることもできた。

”ちいさなメタル”とか、”でんくうのけんとよるい”とか、怪しすぎるラインナップの中に、発行数が少なく、今では入手困難なアロニー山水画切手が混じっていたのだ。

引換コインは一万枚。消費者金融の無人契約機はカジノ内に用意されていたから、勝負を続行することも出来たが、さすがに使う気にはなれなかった。いくらニードルでも。

『やめて、それは娘の給食費……』

『てやんでエ。今度の勝負で借金をチャラにして、明日には倍にして返してやんよオ』

なんて展開に、ロマンを見出すことはできなかったからだ。

むしろ、そんな真似をしたら、あのクマに撃たれるし。丸かじりにされるし。

ニードルは長銃で腹をぶち抜かれ、ぬいぐるみにガリガリと頭から貪り食われる自分を想像して身震いした。これでは猟奇小説だ……。

「土産くらいは貰っておくか」

最初の稼ぎを取りおいたコインを使い、二つでひと組のオルゴールボールと引き換えた。

盗品か闇市からの流出物かはわからない。木の実のような形の銀球を軽く振ると、川のせせらぎのような曲が流れた。球中の櫛歯が奏でる響きは次々と変化して、ニーダルの耳を愉しませた。

イスカの年齢では、少し早いアクセサリかもしれないが、あのクマと一緒に玩具代わりに遊んでくれることだろう。

「……………」

と、土産を手に入れたのは良かったが、ナンパの軍資金を稼げなかったのは痛かった。

このまま帰ってクソクマと顔を合わせるのもしゃくだし、と帰宅を思いとどまって、カジノの中をぶらついてみる。

ルーレット、サイコロ、バカラ……。

「っ」

ニーダルがその女に気づいたのは、親と子の数字の下一桁のどちらが多くなるかを当てるゲーム、バカラのテーブルだった。

ハイレイヤーのミドルにまとめた緋色の髪の女。淡紅色の瞳にモノクルをつけ、黒いドレスと紫のボレロをまとった長身の妙齡の女性は、釣鐘型の、とても豊かな胸の持ち主だった。

（ナイスボイン！）

眼福だった。今日、この日、このカジノを訪れた幸運に、ニーダルは感謝した。

彼女はいかにもボンボンといった風の、金髪青年の付き人らしく、静かに寄り添っている。

（なんてことだ。ここがマラソン会場なら、きっと素晴らしい光景が拝めただろうにつ）

飛び散る汗、弾む砲弾、素晴らしき黄金風景。だが、静の中にこそある一瞬の美を見出すのもまた男の務め！

ニードルが別の意味で男らしい瞳で凝視する中、ボンボンは幾度かのミスを挟みつつも順調に勝利者を当て続け、山積みのコインを獲得した。

（……動くか）

ニードルに勝利した老練なディーラーが近づいてくるのがわかった。

交代だ。今、札を配っている若いディーラーでは、ボンボンと彼に入れ知恵している女に太刀打ちできないだろう。

店側の焦りを敏感に読み取ったか、ボンボンはコインの八割をベツトした。

次にボンボンが賭けたのは、親と子のタイ、つまり引き分けだ。この場合、もしも的中すれば、大量のコインを獲得できる。

カードが配られる。観衆が息を飲んで見守る中、開かれる札。一枚目、親は2、子は7。二枚目、親は6、子は…

9だった。

どよめきが、周囲を支配した。

安堵に唇を歪める若いディーラー。興味を失い、離れる観衆。そして、ボンボンがかすかに笑う。

ニードルがいちべつすると、老年のディーラーは真っ青になっていた。

（さすがは、かよ）

見ないふりもできた。だが、ニードルは、今日、この日、この時、このカジノに居てしまった。

若いディーラーに歩み寄り、背を叩く。振り向いた隙に、袖口か

ら”すり替えられた”カードを抜き取った。

「サマは、いけねエなア」

スピードのエース。1がふわりと、テーブルに舞い落ちた。

……

……

ニーダルは当然のごとく叩き出された。

このカジノは公営であり、ハルダラを支配する軍閥が取り仕切っている。

軍といえば、他国では国防や戦闘を担う兵の集団を意味するが、西部連邦人民共和国ではそうでない。

地方における行政権、司法権、立法権の全てを担い、農業をはじめとする第一次産業から、製造業などの第二次産業、金融・通信他の第三次産業を統括し、ついでに人身売買や暗殺までこなす闇の世界をいっしょくたにした怪物だ。

西部連邦共和国とは、共和国を冠していても、実質は地方軍閥ごとの共同統治だ。最大軍閥の主であるパラデイス教団現教主アブラハム・ベーレンドルフや、前教主マルティン・ヴァイデンヒューラーが多くの決定権をもつものの、絶対ではない。地方は、表も裏も地方軍閥によって運営され支配されている。そんな怪物の末端に喧嘩を売って、かすり傷で済んだのだから、幸運というべきか。

（ハルダラ領主から連絡が行ってたか、ディーラーの爺さんが気を利かせてくれたか、かな）

再び紅い外套に身を包み、守り切ったオルゴールボールを鳴らしながら、ニーダルは公園のベンチに座って風に身を任せた。

どれだけそうしていたことだろうか。

「良かった。無事だったんだね！」

目を開ければ、濃紺のスーツに着替えてはいるものの、素晴らしき丘陵を持つ赤い髪の女性を従えた、黄褐色の髪の青年が手を差し出していた。柔らかく開かれたエメラルドを思わせる鮮緑色の瞳と、灰色の上着に隠した若木のような華奢な骨格……

ザ…、と。

ニーダルの視界にノイズが奔った。

どこかで見たような夜の商店街、赤いサンタクロースの衣装を着た自分、降り積もる雪の中に倒れた黒いトレンチコート……

ザ…ザ…

砂嵐のように意識を切り刻む頭痛と幻聴。

こんなものは一過性のものだ。

おそらくは、呪われた炎をこの身に宿した代償。磨り潰される意識を、ニーダルは必死で繋ぎとめようとする。

「おい、大丈夫か？」

「ああ。アンタも無事だったんだな」

まるで自分の身体ではなくなってしまったかのように、木偶人形が如く力の廻らない四肢をどうにか動かして、ニーダルはふらふらと立ち上がり、差し出された手を取った。

「お陰さまでね。私の名前は、クラウディオ・アイクシュテットという。どうだい、良ければこれから食事でも？」

「こんな綺麗なところと相席できるなんて幸運だ」

ニーダルは、気を抜くと付き人の女性の胸に吸いよせられる視線を無理やりずらして、クラウディオに微笑んだ。

「あはっ。ロティは、美人だからね！」

クラウディオは上級繁華街に向かおうとしたが、ニーダルは別にいい店を知っていると断った。

下層繁華街にある屋台で、黒パンとソーセージ、ホットワインを買って、街の片隅にあるスラムの傍で食べた。

「へえ、意外に美味しいじゃないか？」

「だろ。この前、買って驚いたんだ」

スラムは、砂漠から飛んでくる黄色い砂で、半ば埋もれていた。ヨウ化銀で無理やり雨を降らせようとするよりも、木を植えるべきなのだ。魔法の存在するこの世界では、科学技術のみを手段とする世界よりも、より容易に自立型の環境循環システムを構築できるのだから。だが、西部連邦人民共和国は、緑化運動と称して禿山に緑色のペンキをぶちまけ、海外のボランティアが持ち込んだ機材や植苗木を抜いては売りさばき、環境の改善を理由に他国に金や技術をタカリ、無心し続けることを選択した。

結果、緑の草原と山岳は魔力と劇薬に汚染されて砂漠となり、湖や川は工場から垂れ流される廃液で七色に発光し、奇病や奇傷が蔓延するようになった。共和国内だけのことではない。風で流れた砂漠の砂が他国でスモッグを作っても、海に流れ込んだ汚液が巨大く上げなどの変異物を作っても、全ては他国の責任であると怒鳴り続ける。

パラディース教団は幹部以外の、あらゆる人間を蛮族とみなし、他の国々を対等のものとは認めない。それが、西部連邦人民共和国の根源的価値観であるがゆえに。だから。

「……礼なんていらなかったんだよ」

食べ終えた包み紙を外套のポケットに入れて、ニーダルは呟いた。あの時、カジノで一部の人間だけが気づいたはずだ。クラウデオが笑みと共に発したのは、静かな殺気だった。

「アンタ、あそこで抜こうとしただろ」

「それで、私を庇って叩き出されたのかい？ 聞いていた風評とは、随分違うんだね。紅い道化師」

クラウデオが、鮮緑色の瞳を細めた。細い手が包み紙を風に乗せる。それは風に舞うことなく、千々に刻まれて消えた。

「今日は休暇だ。面倒ごとアお呼びじゃねーんだが」

「付き合ってもらっさ。キミもそのつもりで、私をここまで誘った

のだろう？」

まるでダンスでも踊るように、クラウディオは軽やかにステップを踏んで、黄色い砂が爆ぜた。

「ロティ」

「はい。マスター」

付き人がクラウディオの白い手を取り、変化する。まるで緋色の糸が解けるように、豊かな肉体はかき消えて、一本の細剣を形作った。

「教主直属部隊”無限の自由”所属、”処刑人”。

第三位級契約神器フロツティが盟約者、クラウディオ・アイクシユテットだ。

恩を仇で返すようで気が引けるが、民を守るため、私自身の誇りのため、我らが領の治安を乱す、貴殿を捕縛する！」

ニーダルは俯いた。

物凄く、残念だった。ああ、そうとも、そんなことだろうと半ば気づいていた。

熊のぬいぐるみに化ける神器がいるのだ。ヒトガタに化ける神器がいても、今更驚かない。

そんなことはどうでもいい。……期待したのだ。剣を交えることで、人として辿り着くべき最高の景色が、弾む希望が、たわむ禁断の果実が、眼前に開けるに違いない、と。それがまさか、指先ですり抜けていこうとは！

「やあってやるさ、鬨あればいいんだろ。こんちくしょう」

ニーダルは左手を一閃し、魔術文字を紡いだ。炎が揺らめき、穂先に三日月の刃がついた十文字鎌槍が召喚される。

”無限の自由”……教団に所属する契約神器のマスターは、これまでの経験を鑑みて、周囲の被害を考えない。

カジノや繁華街のような人の集まる場所で、武器を抜かせるわけにはいかなかった。

何よりも。

（宿に、イスカの傍に、近づけるわけにやあ、いかねえからなッ）

紅い外套を着たニードルは槍を構え、灰色の上着を着たクラウドはイオは高らかに足を踏む。

黄色い砂が舞い、そして、火花が交錯した。

第三話 午後

七つの鍵の物語 - 祝祭日 - 第三話

3

「
」
清掃と訓練を終えた蜂蜜色の髪の少女、イスカは、歌を口ずさみながら、スケッチブックに絵を描いていた。

小さな手で赤や黒や様々なクレヨンを握り、白い画用紙に塗りつけてゆく。

悪いことをしたと、灰色熊のぬいぐるみ、ベルゲルミルは後悔した。休日の昼ともなれば、いつもなら放っておいても、公園や買い物に行こうとあの男が連れ出したことだろう。

「ン……」

なかなか思い通りに描けないらしく、イスカは描いては破り、描いては破りを繰り返していた。

「……」

ベルゲルミルは、筆筒の上に置かれたリボンの包みを見て、浅く息を吐く。

時計に目を移せば、正午はとうに回っていた。イスカが昼食にと張りきって焼いたパンケーキは、テーブルの上で冷めていた。

「イスカ。そろそろ食事にしませんか」

「ベル。きょうは、おやすみだから、パパといっしょに食べよ？」

イスカは父親が帰ってくるものと信じていた。だって今日は休日で、お祭りの日なのだから。

（ですが……）

それはないだろうと、ベルゲルミルは考える。ああまで言えば、確実にあの男はヘソを曲げる。今頃は自分がいないことをこれ幸いと、小洒落たレストランでナンパした女を相手に食事しているか、その手の宿でご休憩の真つ最中だろう。

「イスカ。体調の管理も訓練のうちだと教えられませんでしたか？」
「……ン」

納得のゆく絵を描きあげられたのか、イスカは渋々といった表情で手を洗い、テーブルに向かった。食前の祈りを捧げ、ベルゲルミルと彼女の盟約者^{あるじ}は二人きりの食事をはじめ。でも、フライパンを振って作っているときに比べ、食べる姿はちつとも楽しそうに見えるなかった。

もそもそと味気の無い食事を終えて、イスカは絵本を読み始めた。ニーダルがせがまれるままに毎夜御伽噺を聞かせたせいか、彼女は物語を好んだ。

最近も勉強も進んで、父親が買い出しのついでに買ってくる、おひめさまやおばけの活躍する本も、一人で読めるようになっていた。そして、今日、イスカが手にした絵本は。

^{ラヴナロク}
「創世神話……」

それは千年の昔、神話の時代の物語。

邪悪なる一人の魔女が、全ての願いを叶える世界樹に至ろうと、魔物の軍勢を率いて神々に挑みました。魔女は、門の鍵たる七つの神器のひとつ、呪われた槍を手にして、神を殺し、人を殺し、妖精を殺し、遂には、9つあった大陸のうち8つを海に沈めました。

多くの人や動物が空飛ぶ船に逃れたものの、残された大陸はひとつ。もう誰も魔女を止められないと、人々は嘆き、祈り、……絶望しました。

けれど、諦めない者がいました。

ひとりの勇者が、魔女の持つ呪われた槍と同じ、虹の門を開く七つの神器のひとつ、炎の神剣を妖精の女王から授かって、世界を救

うために立ち上がったのです。勇者は戦いました。戦って戦って、
万億の魔物の軍勢を打ち破り、遂には神剣で呪われた槍を打ち砕き、
魔女の胸を貫きました。人々の希望と絶望を背負った二人は炎に包
まれて、……この世界から消えてしまいました。

（母様……）

イスカがめくるページを、ベルゲルミルは沈痛な表情で眺める。
これが神焉戦争<ラグナロク>と呼ばれる創世の戦いだと、現代
には伝えられていた。

西部連邦人民共和国では、名も無き勇者こそはパラディース教団
の加護を受けた聖戦士であり、彼の盟友であつた共和国『国父』ゲ
オルク・シュバイツァーと教団は、その後の世界を託されたのだ、
と大々的に報じ、国民に教育していた。

「イスカ。この絵本は、嘘です」

「うん。パパもいつてた。」こんなむかしに、教団はねーよ”””て」

「イスカは、その絵本が好きなのですか？」

「ん！ だって、ゆうしゃさまって、パパに似てるから」

「……」

蒼い瞳を柔らかく細めて、ページを繰る己の盟約者あるじを、ベルゲル
ミルは陶器でできた奥歯を噛み合わせ、複雑な表情で見つめていた。

「く、このっ」

ヒュンヒュンヒュン。

風を裂き、音を立てて繰り出されるクラウディオの細剣は、しか
し、ニードルの紅い外套を掠めることさえなかった。

汗で目にからみつく黄褐色の髪を手櫛で撫でつけ、投棄された不

法廃棄物の間を、灰色の上着で駆けずり回る。

一方のニーダルは、紐で縛った黒い長髪を振り回しながら、三日月十文字槍を手に、器用に受けて受けて受け流し続けた。

剣と槍が奏でる剣戟を伴奏に、足場の悪さをものともせず、生ゴミや粗大ゴミのぶちまけられたスラムをひよいとひよいと渡ってゆく。

「この私が、こんな無様なダンスを踊ることになるなんて」

「フハハハハ。修業が足りないぞオ」

息をきらせるクラウディオに見せつけるように、ニーダルは跳躍、無駄に三回転ひねりを加えて着地する。

「そう、男たるものオ、いついかなる時でもスタアイリッシュー!!」
が、足元には、なぜかバーナの皮が落ちていた。

「ぐはっ」

「あ、阿呆だ」

「バーナの皮を踏んで転ぶ方って、初めてみましたよ」

いつの間にか再びヒトガタに戻ったロティが、汚物に頭から突っ込んだニーダルを見て、淡紅色の瞳をまるまると見開いた。

「ね、ね。マスター。これって貴重な経験ですよね」

「貴重なのか、これ……」

「ふふ。わかつちやいないなア。たとえゴミの山に倒れようと、人には、辿り着くべき境地が、素晴らしい風景がある。俺は、今、それを得たッ」

ゴミの上で、イイ笑顔で親指を立てて微笑むニーダルの視線は、ロティのスカート下から伸びた素足へと向いていた。だから、ロティは踏んだ。

「あゝ、あゝ、目があゝ目があゝっ」

「ストッキングを、いえ、ハイヒールを履いておくべきでした」

再び、糸が解けるように、濃紺のスーツに身を包んだ女性はフロッティに変化する。

細剣を手にしたクラウディオは、野菜くずを払い落とすニーダル

を不思議そうに見やった。

「貴殿は、驚かないのだな」

「職業柄、色んな神器を目にしてね」

むしろ、ぬいぐるみに化した神器に毎日蹴られたり、噛みつかれたりしてます。と心のうちで加える。

（いや、ひょっとしてあいつも化けられるのか）

ニーダルは、想像してみた。

こう、むちむちのグラマラスなボディで、V字水着とかバーニースーツとか色々オプシオンをつけて。……でも、中身は”あの”クマ。

（ちつとも萌えねえええ）

オエー、と重いため息をはいてみる。

「逃げるのはやめて、真面目に戦ったらどうだ？ 私もそろそろ本気で行かせてもらっ」

「その前に教えてくれないか。」無限の自由”は、なんでこうも俺を目の敵にする？」

「そんなの、自分の胸に聞いてみろっ！」

黄色い砂と野菜屑を舞いあげて、クラウディオは踏み込んだ。

突く、突く、突く！

先ほどまでの攻撃とは違い、的確にニーダルの逃げ場を塞ぐ、容赦ない攻めだった。ニーダルもまた、留まったまま、槍で捌くことを余儀なくされる。

（ちい、この短時間で学ぶかよっ）

「シュターレンの地で、貴殿に倒された同志達の怨み、贖ってもらっぞー！」

「他人の領内で破壊活動してたのはお前らだろ。犠牲者だって大勢でてるんだぞ」

「それがどうした？ 謝罪と賠償は請求するものだ。我々には何一つ非などないのだからっ」

「ああ、そうかい」

毒を撒き、資源を略奪し、それを悪とも思わない者や国がある。

誰もが同じように、清潔で豊かな暮らしを夢見るだろう。自ら掃き清め、田畑に種を撒く事で得ようとする文化と、他者に奉仕を強制し、実りを力づくで奪う文化があるだけの差だ。

「そも、この数年で五万人の女性を犯して殺し、十万人の女性を犯して廃人に追いやった貴様のような猟奇的強姦魔に説教される覚えは無いぞ。この鬼畜ハーレム男！」

ニーダルは、クラウドイオの発言の意味が、掴めなかった。

だから、フロツティの突きと共に大地より盛り上がり、槍と化した黄色い砂と野菜のゴミクズの刺突を避けきれなかった。

間一髪、槍の三日月鎌でなぎ倒したが、紅いコートにはいくつもの穴が空き、血が滲んだ。

（フロツティ。”突き刺す”を意味する契約神器かよ。それよりもっ）

ツツコミを入れずにはいられない。

「できるかあ！」

「加害者の言う台詞か」

「一日に何人相手すればいいんだよっ！」

ニーダルは、日々を思い返した。

たとえば平日。ダンジョンでモンスターを駆逐してゆく。

「アハハハ。ハハハ。アーッハッハッハ！」

「ガブ！」

「OUCHI！」

「だから、どうして貴方は大声あげて突撃するんですか。イスカが真似したらどうするんですか？」

「だからこれは敵の注意を引く為の戦術。つか、俺の腕はフライドチキンじゃねーぞ。OUCHI！」

「ガブ！」

言いがかりをつけられて、クソクマにいびられる……

たとえば休日。イスカとともに、商店街に出向く。

「服が傷んじまったから、新しいの買いにいくか」

「ン！」

「よし、これなら生地もいいし、価格もお手ごろ。って、なぜ噛み付こうとする、ベル」

「前から言おうと思ってたのですが、貴方の選ぶ服は地味すぎです。華がない。それでもナンパ師ですか？」

「けど、イスカの年じゃ着飾るには早いだろ。変な虫がついたら……」

って、なんだよそんなフリフリのリボンみたいな服着せられるか、

OUCHI！」

「ガブッ！」

無茶を言いだすクソクマにいびられる……

「そりゃあ、男なら誰だって綺麗所はべらかしてフハハと邪悪に笑ってみたいわ。」

俺の場合、邪悪な笑いを浮かべるところか、邪悪なクマに虐待されてるじゃないか。

何が鬼畜か、何がハーレムか。

俺はこの数ヶ月ゼーマン家の女執事さんロレリンマイヤーも真っ青！？ な鬼姑

にいびられながら、必死で娘育ててきたんだぞ。

その苦しみが、お前に、うおおお」

「……何を言ってるのかわからないが、成人女性に飽き足らず、年端も行かない少女にまで手を出したという噂は本当だったか。このロリコン外道！」

「だからなんでそうなるんじゃあああ」

ニーダルは、三日月十文字槍を自在に振り、地より伸びあがる杭を裂きながら、クラウドイオへと斬りかかった。

しかし、届かない。第三位級契約神器フロツティに宿るロティの意志が、宙空に無数の魔術文字を刻んで不可視の盾を生み出し、斬撃も突撃も弾いてしまう。

上体を崩したニーダルの足を、クラウドイオが操る砂槍が裂き、腕を細剣が刻む。

ロティは勝利を確信した。追い込んだ。ここで、勝てる、と。

一方のニーダルは、槍という長さを活かせぬまま、完全に細剣の間合いへと踏みこまれていた。

笑みが、貼りつく。

（強い。強いけどよ。今のイスカと同じように、まだ武器に頼った強さだ。こいつは神器の所有者であつても使いこなせない。なら、勝てる！）

神器によって強化されたクラウドイオの臂力が、今までどうにかしのいでいたニーダルの十文字鎌槍を弾き飛ばした。

その突きこまれた腕に、右腕を絡みつかせる。

「っ！？」

（誘われた！？）

クラウドイオの余裕が消え失せ、ロツテは歯噛みをした。攻撃によって選択肢を狭めるように、防御でもって隙をつくり、

選択肢を見出すことができる。

弾き飛ばした槍は囷だ。けれど、ただの魔術師に、契約神器の加護をこじ開けることなどではしない。

ア ク セ ス

「え、何、これ。なんなの？」

（クリスッ！ 逃げてええええ）

ニーダルの背から、獣とも機械ともつかぬ何か吹きあげた。彼の瞳に宿るは虚無。世界を呪い滅す憎しみの炎。かつて世界を救った終焉の……

我は封じられし九つの箱を破り、災禍の枝を掴みしもの。
顕現せよ。呪われし焰。世界樹の敵。地を覆す異形の翼よ！

フロッティの絶叫に、盟約者は反応できなかった。

幾重にも張り重ねられた不可視の防御壁と魔術結界は、一瞬にして食い破られ風に消えた。

狂気の笑みを貼りつかせた、ニーダルが左掌でクラウドイオに触れた刹那、明滅する炎の魔術文字が、彼女とロティを覆い尽くした。千年前、近接戦闘に特化した異端の魔術師が鍛え上げた、必滅の爆殺呪法だ。

この認識を最後に、クラウドイオもロティも悲鳴をあげる暇もなく、血と脳髓を沸騰させ、焼け焦げた肉塊と金属片を撒き散らし、消失するはずだった。

が。

「ひゃうん」

「この感触、70のB」

「うわああああ」

ただっこのように、クラウドイオは腕を振り回し、胸部を掴んでいたニーダルを殴りとばした。

ドキメガゴシヤと、酷い音を立て、ニーダルの身体が粗大ゴミに叩きつけられる。

「な、なんで、なんでわかった？」

ツーと、赤い血が垂れた鼻を押さえ、黄色い砂とゴミにまみれたニーダルが息も絶え絶えに答えた。

「揉み慣れて」

「破廉恥なことを言うなっ。どうして私が女だと」

「そりゃあ」

硬直する。忘れたことさえ忘れていのような空白に、ニー

ダルは戸惑う。

（あのクリスマスの日、俺は、誰と）

ザ…ザ…と、思考に割り込むノイズが邪魔をする。

（つか、”クリスマス”ってなんだ？）

記憶を探る手は、真実に届かない。

「ふっ。男たるものオ、いい女は匂いでわかるっ！」

「変態め」

「酷っ」

「公園からずっと、ロティの胸ばかり見ていたくせにっ」

「馬鹿野郎っ。おっぱいに貴賤なし！大きいものも小さいものもお、その美しさを愛でるのがあ、おっぱいソムリエとしての俺の美学っ」

白い歯を光らせて、廃棄物の真ん中で天を指さしてイイ笑顔で胸を張るニーダルを、女性陣は物凄くイタイ目で見つめた。

「マスター。やっちゃいましょう」

「同感だ」

日の陰りが、黄色い砂に映る二つの影を長くのばした。

「のわあああああ！！痛い、痛いって、殴るな刺すな切りつけるなあ」

『ただいま、お見苦しい場面が続いております。川のせせらぎや、木漏れ日の風景を想像してお楽しみください』

一五分後。^{コッ}ボロ雑巾もかくや、というほど、ズタズタのヨレヨレになったニーダルがゴミの中に突っ伏していた。

「ゴフツゴホツ。ど、どうやらこの勝負、俺の致命傷のようだな。今日はこれくらいにしないとやるぜ。また会おうなあ。ふははははは」

発言の割には元気な足取りで跳躍、廃棄ビルの屋根を飛び石のように飛びながら、ニーダルは逃走した。

「待てえ。その首置いてけ。ロティ、駐留部隊に連絡、あいつの宿を押さえる！」

駆け出したクラウディオの足を、ロティは長い脚を伸ばしてひっかけた。

「な、なにをするんだよお」

「クリス。これくらいにしましょう。見逃されたのがわからないのですか」

「でも、これはチャンスなんだ。紅い導家士の幹部かもしれない男をみすみす逃すのか！？」

紅い導家士。

世界をひとつの家にする　というスローガンを掲げ、ロアルド地方を中心に、この一年で驚異的速度で勢力を伸ばしたテロリスト

集団だ。

平等と新世界創造の名の下に、いくつもの銀行に押し入って金塊を強奪、数村の地主を殺して農民達の借金の証文を焼き捨て、溜め込まれていた銀貨を没収し、奪い取った財産で宴会を開き、死体を吊るした宴席で、殺された者の妻や娘を嬲り者にするという陰惨な行為を繰り返していた。

「確かにニードル・グレーゲンハイトは、紅い道化師と呼ばれています。ですが、クリスは、あの男にできると思います？」

「似合わないと思う」

カジノから追い出されても居合わせた盟約者に武器を抜かせることを望まず、戦場にはわざわざ人気のない場所を選んだ。

「彼は、戦闘による被害の拡大を極力抑えようと動いています。奇抜な言動や服装に惑わされなければ、きっと彼なりのルールがあるのでしょう」

あの男は、現時点で闘うべき相手ではない。そう、ロティの淡紅色の瞳が警告していた。

「で、でも代わりに私が破廉恥はれんちな目にあつたじゃないか!？」

「ちょっと、胸を触られたくらいでどうだということです。クリスは控えめなのですから、ひよっとしたら血行がよくなって大きく。どうしました？」

「だったら、だったらロティのを寄越しなさいよ」

「いや、やめてマスター。助けて、誰か、襲われる」

黄色い悲鳴があがったが、危険を感じて逃げ出した、スラムの荒くれ者たちが出てくることはなかった。

(マスターを、クリスを、あの男に近づけてはいけない)

システム・レーヴァテイン。

はるかな昔、神器による戦争で文明を失った人類が、ある英雄のもと、再びの滅亡を防ぐ為に作り出した究極のカウンター！。

ただし、その代償は術者の精神と命。

（あれは、アーティファクト契約神器に対抗する力と引き換えに……。

ヒトがヒトである証。五感を、記憶を、理性を、思考を、その全てを喪失させ、ヒトを殺戮の獣へと変容させてしまう。

発動させた人間は、破壊衝動の赴くまますべてを壊して、自らも滅ぶ。…彼は正気だった。だから、違う。違うはずなのに）

それでも、ロティは大切な妹のような主を、豊かな胸と細い両の腕で包むように、抱きしめた。

最終話 夕刻

3

クラウディオに襲われたロティが、黄色い悲鳴をあげていた頃、ニーダルはスラムの住民に追われていた。

「あの野郎を官憲に突きだせば銭になる！」

「明日の飯の種だ。とっ捕まえる！」

手に手に物騒な鈍器や棍棒をもって、複数の男たちが追いかけてくる。

「おいおい、元気だねえ」

クラウディオが名乗った教主直属部隊”無限の自由”は、契約神器の盟約者だけで構成されたエリート中のエリートで、ベーレンドルフに味方する軍閥においては、雲上の住人に等しい。一方のニーダルは、彼らから見れば流れのはぐれ魔術師にしか見えないだろう。

「向こう側から廻りこむんだ。挟み撃ちにするぞ」

「どうだっ。これで袋のネズミだ」

「そいつは勘弁！」

ニーダルは道路を駆けながら、まだ人が住んでいるらしい廃屋の庭に飛び込んで、洗濯物が干された物干し竿を使って、逆上がりの要領で空中に飛びあがった。そのまま壁を三角飛びに蹴り、向かいの廃屋の屋根へと飛び移る。

「てめえはどここの曲芸師だっ！」

「どっちかつつと、ピエロらしいんだが」

軽くダンスを踊ってみる。途端、石弓の矢が飛んできた。

「ひゅー！」

ニーダルは屋根を走って、追跡を逃れた。要はスラムを出るだけでいい。こういった区画の住人は、隔離されたスラムを出ることを

望まない。なぜなら、外界は、彼らにとってスラム以上の地獄だからだ。

「そらよ！」

スラムと一般居住地を隔てる壁を越えて。

(な)

ザ…、と。

ノイズがニードルの視界を覆い尽くした。

閉ざされた視界が、再び色を取り戻した時、世界は一変していた。むせ返るほどの、血と、糞尿と、死の臭い。打ち捨てられた骸の山と、流れ続ける血の川。巨大な石弓や大砲を撃ちながら、死を運ぶ青銅の機兵と、無数のモンスターの群れ。

放たれた火が、殺戮場と化した町を呑み込んでゆく。

《 なぜ、逃したのだ ? 》

炎がゆらめき、影が踊り、何者かの意志がさざなみのように囁いた。

気がつけば、ニードルは紅い外套ではなく王国の軍服を着て、銀の髪的女を背負って戦場に立ち尽くしていた。

『お願い、ルド。どうか…』

青銅機兵を引き連れ、巨大な角笛を手にした銀髪碧眼の男が哄笑をあげる。

『私は言わば救世主だよ。』

一千年前に偽りのメサイア 神剣の勇者が”救い損なった世界”を救うんだ。

世界樹へと至る七つの鍵のひとつ。無限の威光で怪物たちさえ平伏させる、第一位契約神器ギャラルホルンの力だね」

《汝が魂に刻まれた原風景を忘れたか？ 契約神器という存在が生み出した惨劇を》

炎がゆらめく。町が消える。彼女が消える。仇も、自分自身さえも消えてしまう。

残されたのは、真つ暗な世界。何もない、守るべきものも、生きる理由もなくなった場所。

痛みと悔恨、痛切な怒りだけが、凍る心の中で燃えていた。

《神焉戦争より一千年。神器と盟約者が招く悲劇は終わらない。我々は、世界を護るため、終焉を呼ぶ神器と墮落した盟約者を駆逐しなければならぬ。邪悪な存在を破壊すること。それだけが、汝の贖いであり、汝の空隙を癒してくれる》

炎が伝えるのは。

純粹にして苛烈な白の意志、平和への希求と。

混沌にして愚劣な黒き欲望、引き摺り下ろし踏みつけることを望む怨讐だった。

《我々は我々という個の滅びと引き換えに大悪の徒を滅ぼし、黄昏の世界に黎明を呼ぶものである》

巨大な角笛を手にした銀髪碧眼の男が、フロツティを構えたクラウディオが、ベルゲルミルを抱いたイスカが、暗黒の中に浮かび上がる。

《迷うことはない。芳醇なる実を貪ろう。汝が仇と仇を守る神器を破壊し、この世界に》

空虚の中に、肉体が零れ落ちてくる。其は、炎で満たす為の容器。目的を果たすためだけに残されたヒトガタの兵器だ。

《 救済を！！ 》

『……』

炎の意志が響き渡る闇の中で、自分を呼ぶかな声を聞いた気がした。

『……』

大切な誰かと交わした約束を、思い出した。

「バーカ」

空っぽのはずの存在は、燃え尽きた灰から、ルドウィン・ハイランドの欠片を拾い集めて虚ろなニンギョウに上書きし、ニードル・ゲレーゲンハイトを作り出す。

「そういうのは、男らしくないだろう？」

ニードルは炎に近づいて、オデコにあたるだろう部分をピンと弾いた。

《……》

「心配しなくとも、神器が堕ちた怪物も、人に仇為す神器と盟約者も、見つけ次第俺が狩ってやる。その先にいる、あの男とあの男に協力したモノ達を見つけ出し、相応しい場所へと送ってやる。仇を討つこと、彼女との誓約を果たすこと、俺が出来る唯一の手向けだから」

それは血の色にて塗り固められた紅き誓い。いかなる白も、黒も侵す事が出来ない彼自身を満たす絶対の約定。

ニーダルは煌々と輝く焰の剣を振るい、在りし過去と同様に、銀髪碧眼の男が吹き鳴らす巨大な角笛を叩き斬った。

《忘れるな。ルドウィン・ハイランド。否、ニーダル・グレーゲンハイト。我々は汝であり、汝は我々の一部である》

「ああ、この魂壊れるまで、一緒に行こう」

ニーダルは闇の中で炎に頷き、幻影に背を向けて再び歩み始める。帰らなくてはならない。

真つ暗な世界。何もない、守るべきものも、生きる理由もなくなつた場所。……けれど、彼女との誓いがあり、養娘とクソクマのいる現実。

（俺は命尽きるまで誓いを果たし、イスカとオジョー……あいつの姉兄達を救いだす）

《ニーダル・グレーゲンハイト。我々は、汝は》

レーヴァテイン。人の意志が紡いだシステムは、この時、すでに理解していたのかもしれない。

正義でも憎悪でもなく、復讐でもない。第四の選択を得た時から、ニーダル・グレーゲンハイトという存在は、致命的な程に、異端の使い手であつたのだと。

ゆつくりと、視界が戻ってくる。

ニーダルはスラムを隔てるコンクリート壁を乗り越えて、一般居住区へと戻っていた。

つるり、と何かやわらかいものを踏んだ感触。地面と熱いベーターを交わしたニーダルの頭に落ちてきたのは、バーナの皮だった。

「まあゴミ箱かよ。やれやれ」

バーナの皮を引っぺがし、袋に突っ込んで思う。

（ああ、それでも、いい休日だった、か）

浄化の炎で外套の掃除を済ませ、排水溝脇の道路を走り、ニーダルは帰路を急いだ。

ドブ川で鉄脚のついた甲殻類ザリガニを釣る少年たちに、親らしい大人が今日は祭りだから帰ろう、と呼んでいるのが見えた。

少し、微笑ましくなる。平穏な光景、ニーダルは思う。自分には縁のない日常だ……と。

勢いよく土の道を蹴った時、紅い外套の内ポケットに入れたオルゴールボールが、かすかに曲を奏でた。

……忘れていたことがある。

「アウ、カウ！」

ニーダルは走りながら魔術文字を綴り、宿に残した鳩の使い魔に、視点を飛ばす。

灰色熊のぬいぐるみ、ベルゲルミルは、居間でスーツケースに衣類を詰めていた。

イスカは、台所で唄を歌いながら料理をしている。レタスを千切り、卵を焼き、瓶詰の魚肉をドレッシングと混ぜ合わせ……

けれど、楽しそうな背中と裏腹に、時計を見た彼女の蜂蜜色の髪の下、蒼い瞳は酷く寂しそうだっただ。

ダン！ と強い音を立てて、ニーダルは道を蹴った。黒い長髪をなびかせ、歩幅を広げ、疾駆する。景色が音もなく後ろへと流れてゆく。気がつけば、見覚えのある貸し宿へと辿り着いていた。

少しだけ迷い、ニーダルは僅かに震える手でドアを開ける。

「パパ、お帰りなさい」

ああ、この声だ。

笑顔で振り返るイスカに、ニーダルは思い出す。闇の中で聞こえた声、……大切なもの。

「ただいま、イスカ」

飛びついてきた娘を抱きあげて、彼は朗らかに微笑んだ。

4

ニーダル、イスカ、ベルゲルミルは、イスカの作ったパンケーキとサンドイッチの具材を籠に詰めて、外へと出た。

まだ春は遠く、寒風が吹いていたが、近くの丘には、ニーダル達と同じような家族連れや、若いカップルが集まっていた。

「冷えるな」

「うっん、あったかいよ」

若い父親と娘とぬいぐるみが、一本のマフラーを巻いてひつついている光景は、傍目からはどう見えるのだろうか。

少々小恥ずかしい気がしたが、この時、ニーダルは気にならなかった。

「パパ。ベル。これっ」

イスカがごそごそと防寒具の中から、折りたたんだ画用紙を取り出した。

色とりどりのクレヨンで描かれた、ニーダルとベルゲルミルの笑

顔。

「ああ、ありがとう」

絵を受け取って、ニードルは照れたように喉の奥を鳴らした。

「わからないという顔ですね。この地方では、収穫祭には家族でブレゼントを交換するんです。ほらっ」

ベルゲルミルがニードルに押し付けたのは、ピンク色のファンシーなりボンの包みだった。

妙に子供っぽい彼女の趣味はわかっていたから、ニードルは若干の緊張を込めて、包装を解いた。

出てきたのは王国製のスケルトンタイプの懐中時計だ。シンプルなデザインに、逆に驚いた。

「なんですか、要らないなら返してください」

「いや、嬉しいよ」

お揃いだと首から下げて喜ぶイスカと、丸っこい頬を膨らませているベルゲルミルの掌に、オルゴールボールを握らせる。

「かわいい　パパ、ありがとう」

「珍しい。てつきり夜店のホットドッグが何かになるかと思っていました」

「俺を何だと思ってるんだ」

「フン」

ベルゲルミルは悪態を続けようとしたが、イスカの手前、呑み込んだようだった。

「ン。みんな、なかよし」

イスカが御座を敷いて、籠から食材を取り出す。

パンケーキにレタスと卵焼き、チーズ、ツナなどを挟んでサンドイッチにするのだ。

「いつか、みんなでいっしょにくらそうね。おねえちゃん達もいっしょに」

「ああ、いつか、な」

ニードルは思う。こげだらけのパンケーキと、殻入りのスクラン

ブルエッグ、びしょびしょのツナ。……昔一人で食った飯は、こんなにもうまかったろうか、と。

（なかよし、か）

ベルゲルミルを見ると、相変わらず少し不機嫌そうに、視線をそらせた。

イスカは、殻に当たったらしく、わたわたと水筒からお茶を注いでいる。

この娘はこの娘なりにニードルとベルゲルミルの衝突を案じていたのかもしれない。家族という絆を護ろうと。

『人間のふりをした焼けカスが、捨てられた人形と一緒に偽りの家族を演じるのか』

ノイズ越しに、視界の奥で炎がゆらめく。

そう、ニードルとイスカ、ベルゲルミルに血の繋がりなんてない。自分は、壊れたかつての人格の残滓を継ぎ接ぎし、人間を模倣している兵器に過ぎない。

だが、それがどうしたというのだ。自分の感情が贗物でも、……この温もりだけは本物だ。

（演じる？ 馬鹿を言うな。俺たちは、家族だ）

問題なんて山積みだ。クマには言いたいことが山ほどある。それでも、決めたのだ。共に歩く、と。

轟音が響き、ノイズが吹き飛ぶ。視界に映るのは夜空に広がる大輪の華。

「わあっ、花火！」

「地方のお祭りにしては」

「やるもんだねえ」

色鮮やかな花火の光の下で、ニードル達はそれぞれに微笑んでい

た。

一方その頃、クラウディオこと、本名クリスチーナ・アイクシュテットは、駐屯所で花火の音を聞いていた。

休日だったというのに、うっかり遭遇戦闘なんてやってしまったがため、一人残務処理に追われていたのだ。

「お休みなのに、お休みだったのに、交戦報告を提出しろなんて、師匠は鬼だ〜」

半泣きになりながら、クリスチーナは羊皮紙を万年筆で埋めてゆく。

「モルゲンシュテルン少佐は、きっとクリスを心配してるんですよ」

ロティは慰めてくれるが、手伝うつもりはないようだ。紅茶を片手に、淡紅色の瞳に窓から見える花火を映している。

「こんな心配いらないよ！ ああ痴漢は？」

「監視員の報告では、メルダー・マリオネッテの娘と花火を見ているそうです」

「うわっ、あいつ本当にロリコンだったんだ。もう一度シャワー浴びなきゃ！」

いいこじつけができたとはかり立ち上がるクリスチーナの足を、ロティはにつこり笑って蹴飛ばした。

「報告書を仕上げてからにしてくださいね」

結局、ニーダル・グレーゲンハイトと『紅い導家士』の関係は不明のままだった。

ニーダルが現在ハルダラの地に逗留していたのは、領主と友好関係にあったシュターレン閣領袖エマリツヒの指示で出向していたからであり、行動に不審な点は見受けられなかった。すでに契約は果たされ、依頼料は振り込まれ、発掘品も納められている。

「アリバイは完璧、捜査は完全に振り出しか。でも、必ず尻尾を掴

んでやる」

「……クリス。彼は無関係じゃないでしょうか？」

首をかしげるロティに、クリスチーナは唾を飛ばしてくっつけてかかった。

「だ、だって、触られたんだぞ！ に、にんしんでもしたらどうするんだ！？」

「……もういい年なんですから、私におしべとめしべから説明させないでください」

この契約神器は、とっても盟約者に冷たかった。仕方がないので、鮮緑色の目に涙をにじませ、べそをかきながら愚痴をこぼす。

「年のことゆーなら、ロティなんて」

「私は二十歳です」

「ぶらすいちまんにせんかげつ」

「何か言いましたか？」

紅い髪から瘴気のようなものを噴き上げるロティの朗らかな笑顔に、クリスチーナはぶんぶんと首を横に振った。

「って、ああ、せっかく書いた報告書が汚れてる！？」

「自業自得です」

「ひ、酷いよう」

そんなこんなで、二人が士官用の宿舎に帰ることができたのは、深夜になってからのことだった。

厚底の靴を脱ぎ散らし、灰色の上着と重い肩パットやコルセットを放り投げ、シャワーを浴び直し……、クリスチーナはシャツと下着だけでベッドに突っ伏した。無理やり魔術で閉じ込めていた、黄褐色の髪がシートにばさりと広がった。

ロティが苦笑いしながら服を片づけ、温めたワインを注いだマグカップと、郵便受けに投函されていた手紙を持ってきてくれた。

「アリサちゃんから、手紙が届いてますよ」

アリサ・コードウエル。クリスチーナの従妹からの手紙には、軍職にある自分を心配する文面が綴られていた。

「あの子のためにも、これ以上、姉上の治める土地を荒させやしない」

「そうですね。ニーダル・グレーゲンハイトがどうあれ、紅い導家士を名乗る集団、それが私たちの敵です」

ダイレクトメールやちらしをまとめて片づけ、クリスチーナは、一通の手紙を見つけて歓喜の声をあげた。

「ライブニッツ湖の風景印をゾロ目で。さすが、R・H。わかってるじゃないか!!」

「……」

消印集め、というクリスチーナの趣味が、ロティにはいまいちよくわからない。

もうちよつと女の子らしいものを収集すべきだ、と勧めたことがあったが、「ロティまで女の子は趣味もっちゃいけないってゆうのか!？」と逆上されたため、以後は控えている。

アイクシュテット家において、クリスチーナは幼少から複雑な立場にあり、ともに労苦を乗り越えてきたロティは、彼女の複雑な想いを知っていた。

「よし、早速今日手に入れたアロニー山水画切手を送ってやろう。

これだけは、あのセクハラ野郎に感謝だな」

クリスチーナははしゃぎながら、コレクションファイルに手紙を仕舞っていた。そんな彼女の顔が、とても無邪気で嬉しそうだったから、ロティはほんの少し意地悪しなくなった。

「最近、よくその男と手紙をやり取りしているようですが」

「うん。信頼できるコレクター仲間が貴重だからね」

どこかの地脈通信の掲示板でR・Hなる男と知り合ってから、クリスチーナはかつて以上に元気になり、趣味にまい進するようになった。なんとなく、ロティは理解する。自分はどうか、顔も知らないその文通相手に嫉妬しているらしい。

「そのR・Hって何者なんですか」

「なんでも、官庁の依頼を中心に受ける遺跡探索者らしいよ」

「内実は遺跡荒らしでしょう。あの破廉恥漢と変わらないかもしれませんよ？」

「あ、あんなロリコンの変態と一緒にするなよ。きっと紳士で、こう葉巻の似合うオジ様に決まっているさ！」

剣の師匠であり、煙管の似合うダンディーな紳士でもあるレオンハルト・モルゲンシュテルン少佐の雄姿を重ね合わせ、クリスチーナはうつとりと呟いた。

「R・H。今頃、何をやってるのかなあ？」

……さて、破廉恥と呼ばれ、ロリコン疑惑をかけられた男、ニーダル・グレーゲンハイトが何をやっていたかというところ、日課の筋トレを終えて、星を見ながら酒を嗜んでいた。

そこに、真つ青な顔になった灰色熊の人形が覚束ない足取りでやってきた。

「た、大変なことがわかりました」

「アー、牛乳を水増ししていた毒なら、”消して”おいたぞ」

ニーダルの瞳はトロンとしており、いまにも寝てしまいそうだった。

「貴方が食材の安全に気をつけてるのは知ってますよ。さっきの夜食、パンケーキサンドの食べすぎで太りました」

「アー、そ。熊でも太るんだ。冬眠とかするもんなア」

うつらうつらしているニーダルに、ベルゲルミルはこっつい長銃を押し付けた。

「ダイエットの為に今から素振り千回！」

「なぜに、俺がッ!？」

「イス力をこんな時間に起こせと？ それでも父親ですか？ 私にあの天使の寝顔を起こすなんてできません」

長銃を振り回して力説するベルゲルミルだが、どこか話がおかしい。

「だから、お前が食事を控えるなり、運動するなり……」

「槍も銃剣も似たようなものでしょっつ」

「いや、違うし。だからお前が。そもそも体感重量なら魔術で操作できたる？」

「問答無用！」

ガブリ、とベルゲルミルの牙が、ニーダルの二の腕に突き刺さる。
「OUCHHI！」

ちくしょー、この家での俺のヒエラルキーはどうなってんだ！
一人の男の魂の叫びが、夜空に消えていったという……。

鍵の物語

祝祭日

FIN

七つの

最終話 夕刻（後書き）

拙作をお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8481n/>

七つの鍵の物語 - 【祝祭日】

2010年10月8日12時12分発行